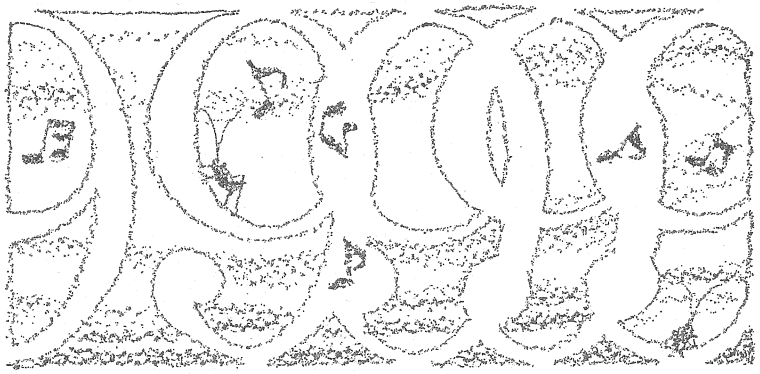
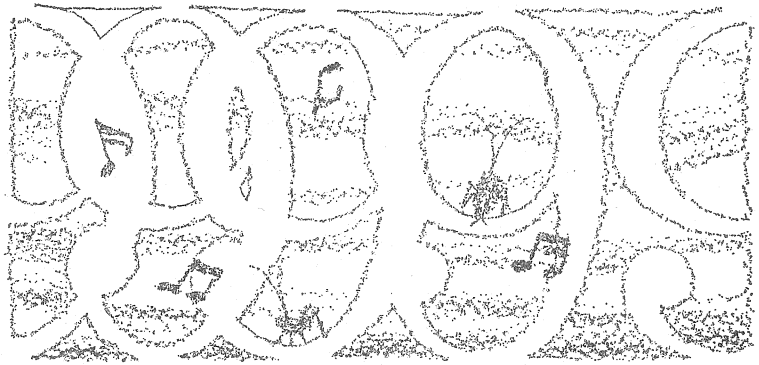


文部時報

昭和五十三年九月
第一二一六号

特集▨文化財の保護

日本伝統文化の特性……林屋辰三郎 4
〔座談会〕
生活の中に生きる伝統文化……8
（出席者）戸塚　文子・山中　昌裕・栗原　一登
田原　久・＜司会＞菴谷　利雄
漆椀をめぐって……福岡縫太郎 27
文化財と科学的保存……関野　克 33
近代建築の保存……村松貞次郎 40
――その調査と当面の問題点――
〔解説〕
国立の芸能公開施設について……文化庁無形文化民俗文化課 52
〔資料〕
無形文化財等指定一覧……58
〔現地ルポ〕
「標津町の広域遺跡保存」について……柳沢　巽 62
十八年ぶりに復活した小浜の壬生狂言……高橋　秀雄 65
随想
標準・目安・制限　林　大 48



法人紹介
財団法人　文化財建造物保存技術協会……日名子元雄 68
特別連載
変わる国公立大学入試④……大学局大学課 72
連載第五回
世界の民族――黒アフリカ――……和田　正平 87
海外教育ニュース……大臣官房調査統計課 74
芸術振興に関する連邦の政策（アメリカ）／教育と青少年問題（アメリカ）／学校五日制実施の原則（西ドイツ）
文部省のまど
「教材基準」を改訂……初等中等教育局財務課 78
測地審「地震・火山噴火予知計画」を建議……学術国際局学術課 80
文化庁創設十周年記念式典行われる……文化庁庶務課 82
「地域社会と文化に関する小委員会」を名古屋で開催――中教審――……大臣官房企画室 84
昭和五十一年度地方教育費、七兆円を超える…大臣官房調査統計課 85
ひしめく四十歳代から五十歳代へ……大臣官房調査統計課 86
霞が関ニュース
やや改善した大卒者の就職……大臣官房企画室 95
文化財　写真と解説……1／表紙絵募集要領……94

表紙　青木　茂生　カット　内部　敬生

座談会

生活の中に生きる伝統文化

出席者
（敬称略・発言順）

戸塚文子（評論家）
山中昌裕（文化庁文化財保護部長）
栗原一登（日本児童演劇協会会長）
田原久（民俗研究家）

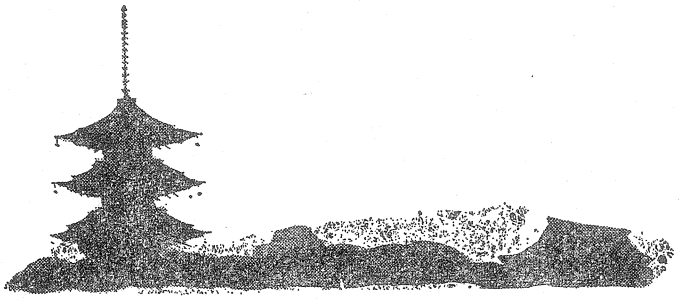
＜司会＞
菴谷利雄（文化庁無形文化民俗文化課長）

（カット　林美紀子）

菴谷（司会）　本日のテーマは「生活の中に生きる伝統文化」でございます。このテーマは非常に親しみやすく、だれにでも話はできそうで、いざ話をするとなかなか範囲が広いものですから難しいような感じもいたします。

近年、経済や社会、あるいはものの考え方といったものまで変化の激しい時代になってきておりますが、同時に、外来文化が戦後日本に更に盛んに入ってきたということもありまして、生活ぶりがいろいろと都会化指向になったり、あるいは能率化というようなことを追求してきたと思うわけです。その反面、物心両面にわたってかなり伝統的な良い面が、知らないうちに消えかかる、衰微していくという現象もなきにしもあらずだと思うわけです。

一方、日本の伝統とか伝統文化というものについて、最近、盛んにいろんな方が論じる傾向が強くなってきていますが、それは考えてみますに、変化がそれほどないときというものは、与えられた文化環境とか生活環境というものに対する意識が鋭くならない。ところが、最近のように世の中が急激に変わって



きて、伝統文化というものがある意味で受難の時代になりますと、一般の人々もそれを見る目というものが鋭くなる。したがって、この際、文化を見る目というものを確かにする。そして、生活の中の伝統文化というものを、ただ放置して消えさせることなく、何かしっかりとつなぎ止めていくみんなの努力というものも、あるいは必要なのではないかと思うわけです。

伝統文化といいましてもいろんな面がありますが、本日は、広く生活とのかかわりで伝統文化を全般的に取り上げていただけたらと思います。

日本独特の〝箸〟

戸塚　非常に範囲が広いんで、どこから始めればよいか難しいですね。人間の生活と深くかかわるとなれば、衣食住と儀礼、祭祀、それから遊びというものがあげられますが。

山中　日本文化とか文化財ということになりますと、ハイクラスのインテリゲンチァの高尚な議論と思われたり、また、文化財というと、〝財〟という言葉に引っ張られて国宝とか重要文化財の話になりがちです。人々の生活そのものに関係する民俗文化財も、どちらかというと、よそ様のものみたいに考えられて、自分たちの生活の中で子や孫に伝えていきたいもの、という形ではなかなか受け取られない。むしろ日常の生活の中に、家庭でも地域でも、日本の伝統的な良いものが残っていて、それが日本人の感受性とか情感というものを長年培ってきたので、そういうおでんのつゆのようなものを、本当に人々が自分のものと理解するところに、日本文化とか文化財保護とかの根本があるだろうと思うわけです。

そこで、まず実際の生活の中での日本的な良いものを取り上げてみたらと思います。今、お祭とか民謡なんかが非常に大事にされかかってますね。それから、衣食住の問題なんかでも、手づくりの極めて日本的な良いものがありますね。

戸塚　一つだけあげろといったら、私はお箸ですね。中国のお箸とは違う日本のお箸。中国のは長くて、同じ象牙にしても、形が違います。先がとがっていません。日本のは象牙のほか、塗り物だとか竹だとか白木だと

戸塚文子氏

か、材料も違います。由布院の竹の箸なんていいですね。海外旅行するときに、私はお箸持っていくんですよ。そして、スパゲティなんか、みんな箸で食べちゃう。小さな村なんかでそうやってると人だかりがして、後から来た人が「もう終わったのか、あと自分がお金出すから、もう一回やってみてくれ」……（笑）

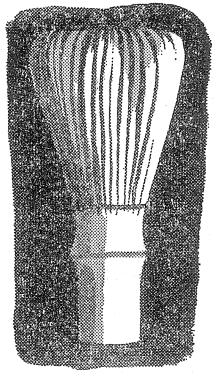
去年、世界中の観光業者の国際会議がありまして、日本代表でしゃべれといわれましたから、いろいろしゃべった中に、日本では外国人が来ると、日本料理屋でもスプーンとかフォークとか、食べやすいように昔からサービスしてあげてる。しかるに、今、日本人が世界中にワンサワンサ行くのに、どうして箸を出さないのか、日本人からもうけている施設――レストランとかホテルは、箸出しなさい。そうすれば、日本人がナイフとフォークの使い方で、マナーが悪いとかいわれなくてすむ。箸を使わせさえすれば、いくらでも優雅に食べてみせるから、といったら、後のパーティーで、必ず国へ帰ったら箸を出すようにする、と各国の代理店の人たちがいってきましたけどね。（笑）

恥ずかしがることないと思うんですよ。二本の棒だから野蛮だという思想があったのねかつてヨーロッパには。つまりナイフやフォークの方が文明として格が上だと。とんでもない話です。二本の棒といったって、ああいう美しい形であり、材質であり、使い良い上に、それをまた使いこなしてきたのは、ナイフやフォークの比ではない。立派な文化です。

栗原　韓国でかつて日本語のいっさいを排斥した時期がありましたね。そのときの話ですが、日本語の箸に当たる翻訳語がない。というのは、向こうのはしは、今お話に出た象牙の箸みたいなもので、日本の独特の箸はなかったのですね、だから向こうでは、日本語そのまま、わりばしといっていた。

戸塚　今、アメリカのカリフォルニア州とかハワイなんかですと、箸は簡単に買えますね、いわゆる割り箸をね。でも、東京下町の、ところてんを一本箸で食べるのね、ああいうのなんて残しておきたいですね。そのテクニックというんですか、用い方というんですかね。

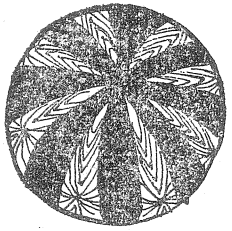
田原　箸といえば、私は一番日本的な特



徴を表しているのが、例の割り箸だと思うんですよ。下町で夜泣きそば食べるとき、片っ方口にくわえてポイと割って、片手にはそば椀持ってこう食べる、あの割り箸だと思うんですがね。ああいう箸は、やっぱり日本の文化の一つの凝集したもんじゃないかと思うんです。杉という木の性質、パッと縦に割れるというあの性質を利用してね。しかもしごく簡単なものですよね、食器と呼ぶにはまことに粗末なくらい簡単なもので……。だけども、それが一つの日本の白木の文化、神社にしてもそうですが、焼き物にしたって素焼きのかわらけのようなごく簡素なものが使われる。そういう日本的なものの一つの象徴ではないかと。私は、割り箸というのはまさに日本的アイデアだと思っているんです。

栗原　そう、その箸を持つ指先の働きなんていうものは、日本人独特のもの、たとえば結ぶという働きにも通じてくる。箸を持つ人でなきゃ結べないのね。私は、ブラジルである製糸会社を訪ねたことがあるんですよ。例のマユから糸を巻き上げる機械がある。その糸が切れたら結び合わせなくてはならない。それができるのは日系だけだというんです。だから働いているのは全部日系の子女、こんなきめのこまかな指先芸があるんですね。お手玉だってそうですね。お手玉は今何にしてるかというと、俳優教育の基礎的なものとして利用している例があるんですよ。昔の子供たちはみんなが、三つ四つ五つと、まるで曲芸みたいなお手玉やったもんです。おはじきにしても、あやとりの類にしても然り。そういうのは一つの遊びに過ぎないかもしれないけど、日本人独特の指の動きになってきている。こういうのもやっぱり日本人の体質が生んだ文化じゃないでしょうか。

戸塚　それは必ずしも食生活だけじゃない。実は卓球ね。あれ荻村さんが世界選手権取ったことありますね。あれは白人系のナイフフォーク民族は、シェイクハンドといって握った持ち方でしかやらない。東洋の日本や韓国や中国は、こういうふうに持つ。この持ち方イギリス人がペンホルダーといったけれども、本当は箸ホルダーなんです。そういう持ち方は、ナイフやフォークの人には上手にできない。それで日本の選手は勝ってきた。今や日本は、だんだん箸の使い方のうまくない若い世代になったばっかしに、中国に取ら



れてしまったのじゃないですか。

菴谷　今の若い人、箸の使い方、前より下手になっているという感じありますか？

戸塚　下手になってますね……。それは、親がやかましく言わないこともあるし。やっぱりあれは、小さい時に持たしちゃわなきゃだめですね。外国人が、途中から解説書いてあるのを見ながらやっても、なかなかうまくいかないというように、本当に体で覚えなきゃだめです。

気候と密接な〝衣食住〟

山中　若い世代になくなってくるというお話で、たとえば私どもなんか家へ帰りますと、服着てるんじゃどうも窮屈な感じがして、すぐ浴衣に着替えちゃうわけですね。若い層はどうでしょう。

戸塚　浴衣には替えませんね。シャツにはなりますけど。

山中　ジーパンみたいなのに……。

戸塚　そう、ジーパンとか、あるいは今ごろですとバミューダとかショートとか、短いズボンとTシャツみたいな、会社じゃ着れないけど、家へ帰ればそういうかっこうになっちゃうんですね。

山中　そのくせ着物が廃れるかというと、娘さんなんか着物に対する愛情が非常に強いわけなんですよ。

戸塚　晴れ着として生き残っているわけで、ふだん着としてはどうも残りそうもないですね。

栗原　日本は湿気が多くて、それから春夏秋冬の寒暖の差がはっきりしている。こういうことが非常に衣の生活に影響している。ところがそういうことを案外考えなくて、流行によっかかるんじゃないですかね。たとえば、日本の下帯みたいなものね、ああいう下着類なんていうのは、湿度を避けるためには一番いい方法だったんじゃないですかね。

戸塚　快適な下着でしょうね。

田原　シャツスタイルというような形になっているけれども、それが今は、夏デパートでもじんべえというのを売り出しているでしょう。私は最近、夏はほとんど家ではあれを着ているんですけどもね。やはり、一応シャツ、半ズボン的なところから、もう一度やっぱり日本人は前がゆるく合わさったものでないと、湿気が強くて暑い日本ではどうも実際の生活に適合しない。半分、下はバミューダなんかになって、半分洋風で、そして日本のじんべえという本質も生かして。こういうところが、西洋文化と日本文化のミックスした、将来性を持った一つの生き方を示唆するんじゃないかな。

栗原一登氏

戸塚　そうですね、夏はじんべえ、冬ははんてんとちゃんちゃんこ。

田原　岡正雄という有名な民族学者がいますけども、あの人は一緒に調査なんかに行きますと、どこへ行っても、「おい、あんパンないか？」といって、あんパン好きで食べるんですよ。冗談半分だけども、あんパンというのは、西洋文化と日本文化が一番うまくマッチした一つの傑作だよというんだけれども、なるほど今のじんべえなんかから考えましても、あんパンというのは……（笑）

戸塚　あんパンととんかつとカレーライスこれ日本料理よ。インドへ行ったってああいうカレーライスありませんから。それから、とんかつがありそうでないんですよ。あれはてんぷらのパリパリッとした衣の感覚が、肉の揚げ物に移行したわけですから。

栗原　そういう食生活では、つけ物なんかもそうでしょうね。日本の持ってるつけ物の豊富さ……。

菴谷　つけ物というのは、ほかの国ではどのくらいあるんでしょうか。

栗原　海外の旅先きでいろいろ聞いてみたが、まあ日本のように豊富でない。チーズあたりが喜ばれているし、種類も多いが、これはつけ物とはいえないでしょうね。日本のつけ物は、秋田とか、信州とか、雪国のものがおいしい。生活の知恵でね。どうして季節の色感や、食料の生鮮さを保存していくかということね。それが今は、どこででも売ってますね。自分の家でつけるということが少なくなった。手作りの喜びがなくなったんですね。

菴谷　自分の家でつけて、そしてそれぞれの味を出してやってましたね。このごろそれを企業が上手に目をつけて、お土産ということで、パーッと短期間に作っている。だから味が何か若干違ってきたんじゃないかという気がします。

田原　そうです。今の製品化されたものと

田原　久氏

は随分違う。日本の味というのも非常に、しょうゆあり、みそあり……。そういういろんなものがミックスされているから、味付けにバラエティがあって、一つ一つに特色があるわけなんですよね。だから、ヨーロッパへ行って同じホテルで三日も泊まると、材料は違っていろんな肉や魚が出たりしても、味付けというのは案外単純なんですよね。で、しまいに、ちょっとこれはノリにおしょうゆでもつけて食べたいな、つけ物食べたいなと思うね。

栗原　しょうゆの味の楽しさですね。ぼくは外国に行くとき、いつもしょうゆをウイスキーのびんに入れていくんですよ。この前なんかスペインで、日本人から売ってくれといわれてね。イタリーとかスペイン、ポルトガルなど、魚介類を食べさせてくれるでしょう。しょうゆ持って行くと、味が一段と楽しい。まあ、しょうゆはロンドンとかパリとか大きな都市では手に入りますけど。

戸塚　ホテルのテーブルにもあります、このごろ。

栗原　しょうゆという味な調味料が、日本の調理法の多様さを教えてくれたのね。

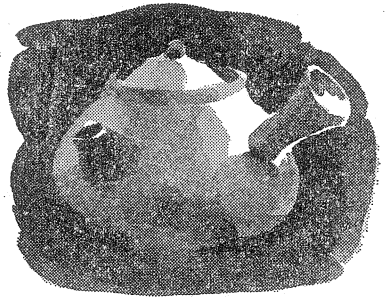
戸塚　みそ、しょうゆ、納豆、ぬかみそ……こういうものは、栗原先生がさっきおっしゃった湿度だと思いますね。発酵食品というのは砂漠じゃできないはずですから……。

栗原　芋の煮っころがしなど日常の家庭で味わっていると、外国のホテルの料理はどうも……。

戸塚　ホテルの食事と日本の家庭料理と比べるのは、ちょっとかわいそうな気がする。外国だって田舎の方に行けばいい。たとえば、ノルウェーの漁村なんか行って、そこのおかみさんの作る魚料理なんていうのは、うまいですからね。ただ、さしみというのは、やっぱりワサビとしょうゆがあったればこそ、と思います。

田原　ただ、外国人もいろんなソースの種類考えて作っているけれども、その味というのは、しょうゆとみそと塩煮ほどの違いはないんですよね。だいたい似たようなもので。

戸塚　それは地球の上に、食いしん坊民族と非食いしん坊民族があるんじゃないかしら。食事は栄養的に食べればいい、エネルギーはほかのとこに使おうという民族がある。イギリスみたいに大植民地をかつて持って、



七つの海を制覇した人たちというのは、食べることなんか毎日毎日考えていたら、そっちへエネルギー取られちゃうから、それはあまりかえりみない。逆に日本みたいに三百年徳川幕府が鎖国してたら、食べることでも考えなきゃ、ほかにエネルギーのはけ口がなかった。そういう国はものすごく食文化が発達する。

日本民族は食いしん坊民族に入りますね。イギリスとかアメリカは、食べるにしても毎日毎日それほど必死になっていない。たとえば、ウニとかナマコを最初に食べた人間なんて、相当勇気があった。それからキノコだって、何人か死んだ、そのなきがらを乗り越えてマツタケが出てきたと思うんですよ（笑）。命がけで食べてるんだから、日本民族というのは。

山中　種類が豊富だったことは確実にいえるんじゃないですか。国土も長いですし。

戸塚　ええ。でも豊富にしたんですよ、いろいろ試して。木の実やなんかも。その中でとにかく勇気を持って、選択したことは事実だと思うの。

文化を形成する〝ことば〟

栗原　伝統文化という場で、衣食住の生活もあるけど、コミニュケーションを図るための言語の生活も見逃せない。

この間、ある人が「散歩」という言葉の語源を教えてくれた。昔は薬というのは、野菜の菜とか、木の根とか、鉱物の石だとかで作った。特に薬石効なしなんていわれるが、鉱石などを使用した。ところが、この鉱石を用いると胃に溜る。そこでそれを散じるために歩く。それが散歩の語源だというんですね（巷説かもしれないが）。もしそうだとすると、ぶらりとたばこを買いに行くくらいじゃ散歩にはならないのね。薬を散らすくらいの行動となると、一定のスピードを持ち、全身的な運動を伴わなきゃならない。――一つの例だけれど、こういう言葉の上からも、伝えられたものの根源を再発見することができる。

また別な見方として、方言の問題ね。共通語という場で、方言を避ける傾向があるけど、方言がないところに文化はないと私は言

い切ってもいいように思うね。

菟谷　文化庁のほうで、方言の調査を始めているわけですけれども、調査のことは別としましても、テレビなんかで、少し昔話がふえてますね。あれは、ちょっと文語的なのかどうか知らないけど、かなり方言が含まれているような気もするんですけど。

田原　私も、北九州市で調査をやるから、最初の打合わせに講師として来てくれというようなことで行ったんですよ。そうすると、昔話を聞き取るのに、「標準語で取るんですか？」という質問が調査員から出たから、それはいけませんよと。生の方言でまず取るんですよと。そして、その方言が分かりにくい方言であれば、後へかっこ書きで注でもつけるべきであって、生のものを取らないと、ほんとに生きた息吹きは伝わりませんよと。標準語に翻訳すると、英語に翻訳するのとたいして変わりない結果になる。

山中　民謡、私は大好きだけど、東京生まれだから標準語で一生懸命覚えるでしょう。秋田民謡を標準語で覚えても、よく出ないですね、あの味は。

栗原　今おっしゃった北九州ね。あの辺りではたとえば、方言でいうとちゃんと敬語になるんですよ。「先生が来た」なんていいません。「先生が来よらっしゃる」とか「来らっしゃる」とかいうんですね。共通語に頼ると「来た来た」なんですよ。そういう意味でも、地域的な古い言葉の中には、日常性の中に宿っている礼節的なものまで巧まずにしっくり受け継がれているものがある。それがこのごろは、しだいに散逸しちゃった。

山中　純粋な形の方言というのは、だんだんなくなってきているんですけどね。家庭の中でお父さんやお母さん、あるいはおじいちゃん、おばあちゃんが、小さい子をしつけてきてますね。あれは標準語とミックスされてはいますけれど、その土地土地の言い伝えが、非常にたくさん残ってますね。そういうところから三つ子の魂じゃないけど、日本人の性格形成なり、情感の形成がなされるでしょう。子守歌なんか、多分にそれがあると思うんですね。

田原　方言でなければ出ないニュアンスというものがあるわけなんですよ。

戸塚　何でも一つにしちゃって、余計なエネルギーを使わせまいというのは、おかしい

山中昌裕氏

と思うんですね。そうすると文化が衰弱する。言語なんか二重生活、三重生活、結構ですよ。標準語も使える。方言なんか私、五つも六つも使える。それがいいことだと信じ込んでいるわけ。英語もやるし、イタリー語もドイツ語もちょびっとやる。とにかく、言語が何重かになるということによって、かえって人間の文化というのは豊かになる。一本に絞ってしまうことによって、ノーベル賞でもとろうなんて、そういう考え方はおかしいと思いますね。一億一千万人全部が、ノーベル賞とる必要はない。人間というのは、もっと負担力ありますよ。

栗原　関西弁もあるし、東北弁もあるから楽しいんで、あれがどこもここも同じになっちゃったら、便利かもしれないが無味乾燥ですよね。

山中　純粋な形での方言というのは大分消えているんですけれども、それにしても東北には東北の一定のトーンがあるし、関東、それから関西にも一定のトーンがありますね。あれなんかは、生活の中でなかなか消えないものでしょうね。

戸塚　消えないですね。

山中　それは何か独特のニュアンスというのがあるんじゃないですか。

戸塚　関西弁のある一部は、漫才やなんかを通して東京人もちゃんと理解できる。テレビやラジオでも平気で関西弁使うのは、関西の人が、それだけいろんな意味で自信を持ってるわけですね。いろんな面で、自信があるところほど、方言が力強く残っていくわけですね。

山中　生活の自信というのが、文化を形成するように思いますね。

戸塚　そうなんです。だから方言にコンプレックスを持つということだったら、その土地が弱いわけです。同時にまた方言を捨てることは、自分の自信を捨てることだと思っていただいていいと思うんですよ。

栗原　小・中学校で方言をもう少し大事にしないとね。小学生のころから、共通語と方言の両方を使い分けなくちゃならないということを理解させる。それがあいまいで徹底していないから、方言に対して蔑視観や劣等感が出てくる。地方の出身者が都市で就職しても、企業の中に溶け込めなかったり、友人ができなかったりして孤立していくというよう

な例は多いんですよ。

戸塚　そうですね。

栗原　外国だってあるんですからね、同じ国の言葉の中に。

戸塚　ええ、たくさんあります。日本で教えてるのは、私の世代ですと、五〇年ぐらい前の敬語風古典的外国語なんですよ。だから行ってみると、向こうは五〇年ぐらいの間に、ずんずん変わっちゃってる。

栗原　方言というのは、その地域における独特な伝統文化ですからね。これに中央的な思いあがりや軽率さで介入したり、お節介をやいたりしてはいけないと思う。たとえばテレビなんかでよく九州のドラマやりますね。九州というのは必ず「おいどん」で間に合わせる。「おいどん」は、「一部の地区の一人称」です。だから出身者が聞くと、この調子で、九州の中のいくつかの方言を混ぜて、その地方を描いたつもりでいる。

関西、東北、いずれもそうじゃないでしょうか。

戸塚　ものすごく困るわね。

栗原　それは困る。方言は方言として地域の文化だから、もっと慎重な態度で接してほしいな。といって、方言丸ごとやれといってるのではない。そんなことしたら、地元を舞台としたドラマはチンプンカンプンになってしまう。その辺は製作者には分かっているはず――。要は、方言を軽視して、思いつきや投げやりにしないでほしいということね。

菴谷　放送文化に対する一つの提言みたいなものですね。

栗原　そうなんです。もっと言語には責任を持たなくちゃいけない。

田原　それと、方言というのは一つの古語の残流ですからね。たとえば四国辺りで、だらしのない服装なんかしてると、あるいは生活でもだらしのないことしてると、あれは「しょうたれ」だというんですよ。しょうたれって何かというと、「潮垂れ」、「潮垂る」なんですよ。潮にぬれてぼたぼたたれるような、まことにしまりのない、ずぼらできたならしいという。そういう古語が残っているわけですね。だからこれは本来の本質的なものを表している言葉なんですね。それをやたらに標準語化すると、そういう本来の意味まで変わってきちゃうわけですね。

山中　ローカリティというか、伝統という

菴谷利雄氏

ものに対する自信が、例えばイギリスなんかおばあさんの代の何とかだとか、テーブルでもなんでも非常に自慢にしますね。日本は古いものなんか恥ずかしがるでしょう。最新式のものを入れるのを良しとするでしょう。

栗原　さりげない言葉の中にも、日本の風習とか、衣食住の問題とか、思考の方法などまでくるめておもしろさが宿っていることがある。そうしたことに気がつくと、ハッと驚いたり、その言葉によって思いもかけない事実呼びさまされたりすることがある。すると、言葉にはこんな意味の深さや情感の多様さがあるのかなと、日本語にいとおしさを感じたりするんですよ。

戸塚　若い人はテレビを多く見るから、テレビの番組で、そういうのやったらどうだということを、私しきりにいってるんですよ。

あこがれの復活
――昔と変わった〝遊び〟――

菴谷　言語の話もいろいろありましたが、さっき子供の遊びというようなお話もありましたね。昔からいろいろ素朴な遊びがあると思いますけど、このごろまるで変わっちゃったんでしょうか。

栗原　変わりましたね。それはかつては遊び道具を、自分の手で作らなきゃいけなかった。今はそうでなくて、遊び道具は売ってるんですよ。だから自分で手作りの遊びというものがなくなったことと、それから家庭での母親が子供と一緒に遊ぶ、いわゆる縁側的なものがないんですよね。縁側というのは、湿気の多い日本、雨の多い日本で、非常に大きな役割をしたんですよね。ああいうところでみんな子供が集まって、おはじきしてみるとか、あやとりをしてみるとか、そういう場があった。そういうものがだんだんなくなりましたね。

山中　折紙は残ってますよね。あれ、外国へ行って折ったら、みんなびっくりするんですよ。

田原　今、一つの教育材料に使ってますからね、教材として。

山中　だから同じそういうものでも、若い人の中でも残っているものと消えていくものとある。なぜそれが残るんでしょうね。焼き物だってそうですよね。近代的になったからみんな西洋式になるかというと、非常に日本的な焼き物、このごろずいぶん出てるでしょう。だいたいこの畳だってそうですね。建物はみんな団地みたいになったけど、やっぱり応接間以外は畳の方を好むんじゃないでしょうか。

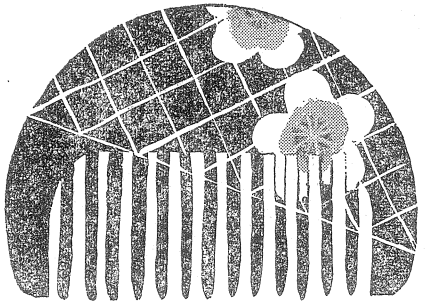
菴谷　そうですね。さっき湿気を基調とした文化だって栗原先生おっしゃいましたが、畳というのは湿気と関係が……。

戸塚　非常にあります。床というのが下にありますね。あそこが一つの防湿の役割をしますからね。

菴谷　そうすると、日本の気候が変わらない限り、ほとんど畳の需要というのはずっと続く……。

戸塚　いや、将来これは、ぜいたく品になるんじゃないかという気がしますね。石油化学製品の畳は、残るでしょうけれども。イグサで編んで、ちゃんといいへりをつけてというものは、非常なぜいたく品になっていく可能性が高いですね。

栗原　そうですね。ぼくらの家でも、畳の部屋は一つしか作らない。それは女性が着物を着たりする部屋なんですよ。ゴロッと寝る



のはベットの上でいいというんですよね。ほんとは畳の上に寝るというのは、夏なんかとても気持ちがいい。ゴザを敷いてね。

戸塚　それがバカ高くなって一部屋分は買えなくなる。一畳とか二畳をどこかへ入れるしかない。ちょうど日系人の人たちのお家ね。あれなんか、我々の未来を示唆するんじゃないかと思うんですけど。そういう時代が来そうですね。

山中　日本ではやっぱり稲作との関連があるでしょうからね。水田が全部なくなっちゃえば、おっしゃる通りのことがあるけども。

菴谷　そういう意味では、心情としては伝統的な昔から慣れているもの、それは当然ある意味で合理的な点もあるわけですが、それを一生懸命求めても、産業的な面とか、生活のもっと別のところで基盤が変わっちゃうと、どうにもならないのですかね。

戸塚　どうにもならないですね。ワラを残していただくためには、非常に高いお金を払って契約しなければならない。イグサというのは非常に栽培のときに暑い。イグサの育つところは特殊な風土ですからね。すごく手がかかるんですってね。米作ってるほうが楽でいいんですって。だから、今はもうほとんど年寄りの人が、昔からやってるからというんでがん張ってるんでね。銭金では引き合わん作物だって、聞いてるんですけどね。

栗原　かつては自分の家にささやかなりとも庭を作ったが、今は庭など作れやしない。そうすると、ビルの一室の料亭の部屋などの一隅に庭らしいものを作って満足する。これがさらに合理化すると、なんであんなところにそんなものを作るか、もう一間作ったほうがいいじゃないかということになる。そういうふうにだんだん陶汰されていくんですね。そういう一面と、今度は庭を作るというようなことができなくなるから、逆に、そうしたものを身近にしたいという、あこがれみたいなものが起きてくる。今の着物なんかに表れているのは、やっぱりあこがれの復活じゃないでしょうかね。

菴谷　あこがれの傾向というのは、日本人の中に無意識にまた戻っているような感じありますね。

田原　西洋化というのは実生活上しようがないと思うんだけど、その中にやっぱり本来持っていた日本人に一番合うものというのが、さっきのじんべえといったような形で、もう一度、懐古的というか、一種のいにしえ帰りをしている面があると思うんですよ。

〝祭〟、なくなった縦の関係
――みんなが参加できる条件を――

山中　お祭をどうごらんになりますか。最近、大分また盛んになってきていますが。

田原　〝秋の亥の子〟という行事が関西にはあるわけです。あのときに、わら鉄砲で地面を突いていって何かもらうわけです。それを学校で、あんなこじきみたいなまねしちゃいかん、といって止めたんですよ。これなんかほんといいますと、七とこもらいとかいうような言葉があって、何かの行事のときに、七軒からおかゆだとかおもちだとかもらって食べると、大勢の人のいういろの福運、強運というものを自分の身に取り入れるという、本来日本人の考え方があったわけです。こういう本質というものは、もう少し大事にしていかないといけない。そういうものの中に、本当に日本の文化の本質的なものがあったのを、外形的な見方だけで教育上止めるというようなこと、これ、相当いろんな面でたくさんあったと思うんですけど、こういうのはもう少し反省してみなきゃいけない面があるんじゃないかという気がします。

山中　学校教育とはまた別だと思うんですね。地域の生活の中で生きていくものでしょう。だから、たとえばねぶたというのは青森にありますよね。長崎でおくんちがある。ねぶたを全国共通にしたってしようがないんで、ローカルのものを自信をもってやってくところに意味があるんで、学校教育でいえば、ローカルのいい文化を無視しないで、それを生活の中で生かしていく、ということを大事に考えることでしょうけれど……。

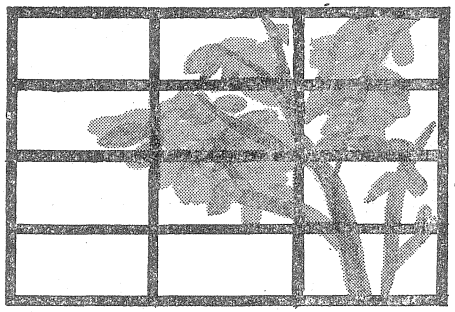
栗原　祭というのは、私は、現象的には祈願だとか、感謝だとか、そういうものからの発生でしょうが、一面、地域の中で要求される社交、休養ということがあったと思うんですよ。

戸塚　レクリエーションですね。

栗原　ええ、レクリエーション的な楽しみ。一つは仕事休み。本来は、これが休養に通じたのでしょうが、社交的な広がりにつれて後には負担になってしまったんですね。それと祭を通じての縦の世代の交歓――。かつては老人、若者、子供といった縦の社会関係が祭の中では深かった。青年が子供たちをリードする。そういうことで、青年から子供たちはいろんなことを教えてもらえたんですよ。伝達の機能というものが祭の中にはあったのですね。それが今は観光的運営になってしまったり、子供たちは子供たち、若者は若者というふうになっている。その復活ね、今ほしいものは――。祭の中での縦の関係ね。老人が壮年に向かって語りかけ、壮年が若者に、若者が子供に語りかける。そういう人間社会の縦関係が、もっと祭の中で活発になっていくとおもしろいんだろうと思うな。

山中　私は東京生まれの東京育ちなんですが、私の子供のころは原っぱもあったし、一緒にどぶ掃除やなんかやったりしたんですけどね、みんな舗装されちゃったでしょ。今の状態ですと、都会では子供の学校を通じてのコミニュケーションしか人間のつながりがないですよ。子供同士も、学校でのつき合い以外にあんまりないんですね。

戸塚　それがまた、試験受けるときの敵だったりしてね。心からの友情が生まれないと



いう悲劇が……。

山中　だから田舎でお祭があると、それは負担の問題もたくさんあると思いますし、随分、市町村や県なんかも助けているようですけどもね。何か一緒にやる作業があるというのが、非常にぼくはいいところがあると思う。よく地域の連帯感がどうのこうのとおっしゃるけど、同じところにいるから連帯感持てといったって無理ですよね。

戸塚　それは理屈ですからね。理屈じゃなくて一緒にやりたくなることですよね。

山中　そういうお祭というのは、ぼくは単にノスタルジアじゃなくて、みんなが気楽に楽しみながら一緒にやれるという、その土地の生活というのを、うるおいのある生活を地域で築くとすれば、非常に大事なものになると思うんです。

菴谷　まさにおっしゃる通りで、文化庁が考えている民族文化財、お祭なんかもそうで、いろいろ行われているのがあるんですが、さっきもちょっと申し上げましたように、世相が、一〇年単位ぐらいで変わるわけですね。そうすると、各世代によって育った若いときの基盤が違う、なんとなく考え方や生活ぶりが違う。しかし、今指摘されましたように、一つの場というものが祭であるし、それをまた支えるのがいろんな民俗芸能といわれるものだと思うんです。それを一緒にワッとやるというのは、地域社会にとって、たいへん無形の効果を生むんではないかという感じがするんですがね……。

それがこのごろ、だんだんお祭を支えるエネルギーといいますか、見る方はものすごくありますね。なんとなく伝統的だし、きれいだし。ところが、実際にやる側が大変になってきているらしいですね。これは労力を惜しむということもあるけど、今の生活は昔と違って、ある共通のサイクルが地域全体としてなくなった。つまり、もうすぐお祭のころだからそろそろ準備しようやという、一致した生活基盤が少なくなっちゃっていることもあって、そこらへんが、今後せっかく貴重なものを残そうというときに苦労するわけです。

山中　お祭が盛んになると心配する面が一つあるんですよ。みんなが見てくれるという人で、いき過ぎた観光で、ショー化してコマーシャルベースになっちゃう。これはかえってその土地土地の人が参加できなくなっちゃう。

戸塚　全部プロでね。

山中　ええ。じゃあみんなに任せておくかというと、今度は負担で大変だということになる。それでこういうものは、民俗文化財という考え方に立って、お宝というんじゃなしに、生活の中に生きてるそういうものを、いい意味でみんなが参加しながら残していける条件、こういうのをつくらなければいけないんじゃないかと思いますね。

戸塚　若者が就職でほかへ出てっちゃうんで、引き山とか山車とかおみこしが、体力のない女こどもと年寄りだけになっちゃって引っ張れないという話がある。そしてプロのみこしかつぎが雇われてくるというようなことになっちゃってくる。唐津の場合はみんなよそへ就職するときに、条件つけるんですって。ふだんの休みは返上するけれども、くんちのときだけ帰らせてくれと。その条件でないと就職しない。くんちには必ず若者が、大阪へ就職してようが、広島へ就職してようが、独身なら一人で、妻子ができれば妻子を連れて帰ってくる。だから山が引けるんですね。

見直そう民族の〝英知〟

菴谷　栗原先生、何か別の話題がおありのようですが。

栗原　私は、一つ伝統的なものの中で見直したいと思うことは、民族が作り上げたいろんな健康法とか治療法とかがありますね。

今は、四万種類からの薬があるそうですが、かつて我々は薬が少ない時代に、山野にあるものを利用することで生き抜いてきた。今の子供たちは、けがをしたといえばすぐ包帯をして、何か塗らなくちゃ落ち着かない。私たちは、母親のつばでも野草の葉っぱでも治してきた——。たとえばこんなことがあるんですよ。私のところで目にごみが入る。そしたら「目の神さん、目の神さん、私の目ん中にごみがはいりました、どうぞたたき出してください。向こうの山ばか、パッパッパッ」とつばを三度吐く。こういう呪文めいたものを教えてもらった。その中に何か秘密でもあるのかと、後年になって言語的に考えてみたけど何もない。結局は、その呪文を唱えている間に、目に入ったごみを涙が流し出すということ。

戸塚　涙で——。

栗原　タイムの問題なんです。涙腺から涙があふれ出て、ごみを流し出すまで手で目を触らせないようにしたんですね。この呪文めいたものを一、二回口に唱えながら待っていると、ちゃんとごみが出てくる。こうしたものは迷信というのではなくて、我々の父祖が日本という風土の中で作り上げた英知だと思うんですよ。我々がいかに生き抜いてきたかということを、そういうものの中から考えてみるのも、生活文化、健康文化というもののありようじゃないでしょうかね。もっともこれは、いわゆる迷信ときちんと区別しなくてはいけないが……。

田原　迷信というものの中には本当に害のある迷信もありますけど、よくよく研究してみれば相当な科学性を持ったものもあるわけなんですよね。迷信だからやめなさいということも一つの画一的な教育であってね。だから民俗学の上では迷信という言葉は使わないことにしているんです。俗信と称している。一般通俗に民俗として信じられていたと。

戸塚　しゃっくり止めるのね、ご飯茶わんにお箸を十文字にして、その四か所からお湯を飲む。これは絶対止まるんですよ。（笑）四か所から飲むということは、要するに水が少しずつしか入らないわけですよ。がぶがぶ飲むと、しゃっくりって止まんないんですね。さっきの呪文の間に時間が経つというのと同じ、その時間と、落ち着きと、少しずつ入っていく液体と……。

菴谷　そういうのを昔の人はいちいち内部を解剖するというようなことはしなくても体験的にちゃんと知っていた。

田原　いわゆる生活の知恵ですよね。

山中　じいちゃん、ばあちゃんが一緒にいましたからね。今はそれがいなくなってるから、だれもそれを教える人がいない。

栗原　そういう基本的なものを、やっぱり日本人は長い歴史の中に作ってるんだよね。たとえばやけどする。医学的に認められているやけどの薬というのは、あるのか。ところが民間の中では、そういうときの応急の手当がある。しかもそれで救われたという話なんかも現実にあるわけなのね。迷信といって逃げるわけにはいかない。

戸塚　わが家のやけどの妙薬は、竹の皮をかんの中で黒焼きにするんです。白い灰にしちゃいけない。黒く焼けた段階でパッとふたでもして消しますと、竹の皮の黒焼きができますね。それを純正ごまの油を加えまして、すりばちですります。それを塗ればあとかたなくやけどが治るんです。いい竹の皮使わなきゃだめですよ――そりゃ、近代医学でなきゃいけないのは医者にかからねばだめですけど、軽いやけど的なものはこれで治る。みなさん健康保険がおありになるから、すぐ医者へ行くけど、私は健康保険入っていないんですよ。自分のとこで、たいがいのことは、治そうというわけで。（笑）

栗原　だからもう一ぺん人間を、ときどき大人にしろ子供にしろ、原始生活に帰ってそこに自分を置いてみる。そういう原始生活的なものの中で自分を守っていく、生きていく。現実に甘えないで、そうした場で人間再確認をすることも大切ではないか。そうした点でもっと私たちは、祖先の蓄えた力というものを、再確認する必要があるんじゃないかという感じがしますけどね。

山中　結局、家庭が核家族化しちゃったた

めに、家庭の中でそれが行われにくくなっちゃったですからね。だから、地域社会の文化活動、社会教育の活動とかですね、そういうところでそういうのがずっと伸びてきますと、生活の自信というのがでてくると思うんです。

栗原　前方を向きながらも、時には立ち止ってディスカバー日本の知恵、歴史の知恵、民衆の作った英知への復帰を考えてみることですね。

菴谷　今のお話なんか非常に示唆的だと思うんです。つまり我々は、ものすごく人工的であり、すべて仕組まれた生活環境の中に安住しているわけでしょう。ところが人間というのは、いつ昔のような自然環境的な、あるいはもっと不便な状態に置かれるかもしれませんね。そこでうっかりしていると、一巻の終りということだってあるわけですね。そういうときに、今のような昔から積み重ねられた、応急的ではあるかもしれないけど知恵というのは、非常に人を助けるということでしょうね。

田原　ええ。だからそういうものが古い昔から積み重なって、そして今の知恵として残ってきているわけですからね。これは基本的な知恵なんですよ。こういうものはやはり大事にしていかなきゃいかんと思います。

山中　私はおもしろいと思うのは、すばらしい芸術家という方がいますね。歴史の中でときどきすばらしい芸術家が出てきますけれども、大芸術家の子孫からそれが必ずしも出るとは限らない。ほんとのまさに庶民の典型の中から出てくる。昔の人ほど生き抜く力が強かった。そういう中でいろんな自分の生きる知恵だとか、感受性が築かれてるわけでしょう。それがすばらしい芸術で洗練されたものを見て、自分なりに受け止めて、発展させてきたわけですよね。今日、日本文化といわれるものはそこにあるだろう。じゃあ私どもが文化財というものを大事にしていくのは、後世に子や孫にずうっと伝えていくわけですけど、単に大事な宝物を伝えるというだけじゃなしに、これはやはり日本人の文化を築いていくもとになるから守っていくわけで、日本人の生活そのものがどうなっていくか、そこのところをもっと大事にしないと、文化財だけが遊離しちゃうんじゃないかと心配してるんですけどね。

戸塚　博物館に入ったり、遺跡化するというね。生でなくなるということはありますね。そりゃあ遺跡も大事でしょう。しかし、特に生活に深いかかわりをもってるものや、日本の自然の気象条件とか、地形とかいうものを長い期間でとらえるとすれば、そこでかつて生き抜いてきた人たちが、いろんな体験を経た結果洗練され、取捨選択を行ってきて残ったものというのは、やっぱり何かあるはずですよ。我々も、そのえり抜きをやればいいんですよ。

山中　そうですね。

戸塚　やたらと捨てちゃうというんじゃなくて、一応フィルターにかけて、捨てるか残すかというね。それはみんながやらなくちゃいけない。偉い人が一人や二人やるんじゃない。何とか審議員がやるんじゃない。日本人の一億が全部それをやらなくちゃいけないと思う。

田原　だから民俗学は内省の学だ、自ら省みる学だと柳田国男氏はいっていますけど、なかなか自分では本質的なものを省みられないんですね。ひとつ外国人に聞いてみることが必要じゃないかと、私は痛感しています。

というのは、私はこういう経験したことがあるんです。フランスのソルボンヌを出た女性ですが、本当の日本の民俗というものを研究したいといって私のところへ紹介されて来た。いままでフランス人で日本の民俗を本式に調査した人はまだいないんです。この人が初めてでした。そこで、「いったいあなたはどういうことを研究したいんですか」と聞いたら、日本人の植物を使って生活するその姿を、地方の村に住みついて細かく調べたいんだと。それで私いろいろ考えてみたら、なるほど西洋人、特に大都会のパリジェンヌなどは、木製のものもありますけれど、石の家に住んで、皮製品のものがたくさんあって、そして金属のナイフ、フォークで、陶器のお皿で食べる。植物を使う生活、あんまりないんですよね。

ところが日本の家というのは、ほとんど植物で、畳、障子、雨戸、それからわら屋根、もうほとんどが植物。そして使われている道具もほとんど木製、竹製、わら製、そういったもの。ヨーロッパから見ると、それが大変珍しい生活なんですね。そのことを私は、パリの女の子に逆に教えられて、なるほどこれは、我々ももう一度そういうことを原点に立ち返ってみなきゃいけないんだなと思いました。

山中　日常的なものの意味というのは、そこで暮らしていると気がつかないんですね。

田原　そうなんです。日常のあたりまえのことになりますから、我々は余り馴れ過ぎていて、そういう大切なことにも思い当たらない。外国人に教えられて、ハッと気がつくわけです。

山中　だから、おでんの種とつゆの例でいえば、おでんのつゆは種からにじみ出ているんでしょうけど、それを徐々に捨てて、種をついでいくからうまい味が出るわけですね。生活の中で、いいものを自信をもって使ってきて、生活の中の文化を大事にすることが、文化財保護の基本だと思うんです。そうするとみんなが、文化財というものを自分のものと考えるようになるでしょう。

菴谷　生活に生きる伝統文化というのは非常に広くて、なかなかいい尽くせませんが、いろいろとポイントの話題が出ましたし、それぞれの具体的なお話の中から、我々日本人が、生活に生きる伝統文化とか日常生活を考える場合のヒントなんていうのも得ていると思います。この辺でお話を終りにしたいと思います……。

栗原　日本にはそういうときいい言葉があるんだ、よろしくとかね。（笑）

戸塚　どうもどうもとか……。別れの言葉だって日本語はおもしろいですね。外国はボンジュールとか、グッドバイとか、全部グッドでなくちゃいけない。日本人はさようなら、さようなればどうなるのか分からない。こういうの私大好き。

菴谷　さようならというのは、どういう言葉の結びつきですか？

戸塚　「しからばこれにて」という意味。さようなれば、これにて失礼つかまつるなのか、何か分からないんです。それはどうでもとれるわけです。さようならば、で切っちゃっている。

菴谷　本日はどうもありがとうございました。

児島善三郎『雪柳と海芋に波斯の壺』

緑色をバックに、大胆でのびやかな筆触と華麗な色彩による花が、画面いっぱいに拡がっている。ペルシャの壺が置かれた円テーブルの、赤と茶の粗い稿模様も、画面全体の豪華な雰囲気に大変効果的である。児島善三郎（一八九三―一九六三）は日本的油絵の創造を目指し、昭和戦前から戦後にかけて活躍したが、この作は第二回現代日本美術展に発表されて好評を得た代表作の一つである。

福岡市に生まれた児島は、上京して岡田三郎助の本郷洋画研究所に学び、二科展で受賞したのち、一九二四―二八年フランスに留学した。帰国後同志たちと独立美術協会を創立し、その主要メンバーであった。留学中油絵の基本の修得につとめた児島は、帰国後日本の古典、とりわけ桃山の障屏画や東洋画の線描から深く学び、人体、風景、静物に、独自の豊かな装飾性をもつ画風を展開した。壺の底辺の処理などにも、この画家特有の工夫のあとが見られる。

（三木　多聞）

編集後記

◇今年の夏は各地で記録的な暑さが続き、深刻な水不足に悩まされた地方が多かったようですが、読者の皆さんにとって、この夏はいかがでしたでしょうか。

◇今月は文化財の保護、特に私たちの生活の中に生きている伝統文化を中心にとりあげてみました。

科学技術の飛躍的な進歩によって、私たちの日常生活面でも便利なことが多くなりました。しかし、反面これに伴って、生活様式も昔と比べると随分変わってきており、昔からの慣習、生活用具などで、それがいつしか消え去っていくという現象も多々見られるようになりました。

そこで、この際、我々の祖先が長い歴史の中でつくりあげた伝統的な民俗文化を、もう一度見直してみようではないかという気運が高まっています。貴重な文化資産の保護とそれの活用のためにはどうしたらよいか、識者の方々にいろいろな角度から論じていただきました。

◇来月号では、高等学校の新学習指導要領について特筆します。

MEJ　61　月刊　「文部時報」　9月号　第1216号

著作権所有　文部省　昭和53年9月5日　印刷　昭和53年9月10日　発行

発行所　株式会社ぎょうせい
本社　東京都中央区銀座7丁目4番12号（郵便番号　104）
（営業所）　東京都新宿区西五軒町52番地（郵便番号　162）
電話　東京（268）2141（代表）
振替口座　東京9―161番
印刷所　株式会社　行政学会印刷所

定価　200円　（〒33円）
年間購読料　2400円　（〒共）
＊　ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます
＊　なお、購読の申し込みは、直接営業所またはもよりの書店にお願いします